

召されたままの状態

人間というのはなかなか円満にはなれないものである。神の前に清くありたいという熱心のあまり、極端なことを主張したり、極端な行動に走ったりする。コリントの教会の中にも、特に性に関して、性は汚れたものであるとして、神の前に清く生きようとするあまりキリスト者は独身を守り通すべきだと主張したり、神の前に清さを保つためには、異教徒（未信者）の夫または妻と別れなければならないと考える極端な禁欲主義が起った。

パウロは、そのような人々に対して7章前半でその行き過ぎた潔白主義の誤りを教え、独身主義を主張した人々には結婚の制度とその祝福を語り、未信者(異教徒)の配偶者を持って悩んでいる人々には、結婚を通して注がれる神の祝福及び夫婦関係の中に働く神の恵みの働きについて語ってきた。

たとい相手が異教徒だからといって、汚らわしいと思い、相手を避けようとか、別れようとしてはいけない、そのままあなた方は主の恵みに召されているのだ、召された時の状態を悲しんではならない、恥じてもならない、各自は神に召されたままの状態（立場）にしたがって、しっかりと信仰に歩みなさい、と。そしてこの大切な原則を教えるために、17節以下で、当時問題になっていた割礼と無割礼、奴隷と自由人の問題をとりあげて説明する。

割礼を受けるか受けないかということは、当時は実に深刻な問題だった。割礼はユダヤ人の誇りだった。自分たちこそ神の選びの民であるという誇りのしるしだった。そして、割礼を持たない異邦人を彼らは「無割礼の者」と称して軽蔑した。

一方、自然のままの肉体美を誇るギリシャ人・ローマ人の世界では、体に傷をつける割礼は軽蔑と嘲笑の対象だった。ギリシャ・ローマの華やかな文化の中で多くのユダヤ人がその文化の影響を受けていたが、ユダヤ人の中には割礼の跡を恥ずかしがり、割礼の跡を手術して隠そうする者も出た。

しかしながら、それとは全く反対に、当時の教会には、熱狂的なユダヤ主義者がいて、人はキリストを信じる信仰だけではなく、異邦人はみなモーセの律法に従い割礼を受けなければ救われない、と主張した。そういう律法主義者の教えに影響されて、異邦人の中には、より良いキリスト者であるためにはユダヤ人と同じように割礼を受けなければならないのではないかと思う人々もいたのである。

それに対してパウロは言う。神は、割礼のある者はあるままに、割礼のない者はないままに、そのままの私たちを受け入れて下さっているのである、だから、自分の今の状態を恥じてはいけないし、悲観してはいけない、割礼のある者はあるままに、割礼のない者はないままに、自分の召されたままの状態に神の恵みに生きることができるのだ、これが福音なんだ、というのである（18~20節）。

その原則をコリントの禁慾主義者たちに適用して彼は言う。救われてキリスト者となったとき、たとい夫婦の相手が未信者のままであったとしても、夫婦関係を厭ってはならない、たとえ相手が異教徒であっても、結婚関係を解消しようとしてはならない。そのままの状態にとどまっていなさい。おのおの主から分け与えられた分に応じ、それぞれが神に召されたときの身分(状態)のままに歩いていいのである、と（17節）。